

塚越 義幸 学位申請論文

『芭蕉俳諧に表現された漢詩文 ―享受とその変容―』

論文の内容の要旨

本論文は、蕉風俳諧における漢詩文調期の実作や俳文を通し、従来指摘されてきた漢詩文の出典論に対し、「漢詩文をどう捉え（受容）」「どう俳諧作品に昇華させたか（変容）」という視点を出発点として、漢詩文の受容と共感を五部にわたり考証している。

第一部一章については、延宝（一六七三～一六八一）から天和（一六八一～一六八八）期の新奇を求めた漢詩文調の増加傾向を、漢詩題風の詩題を持つもの、漢文体を用いるもの、漢文訓読体（書き下し文）を用いたもの、句点（圏点）を用いたもの、「くを」文体を用いたものなどを五分類し、その著しい増加傾向を（特に芭蕉と其角）指摘すると同時に、これはあくまでも和文体の

中での個性を狙う点を指摘し、「漢詩文調」により芭蕉の新風俳諧に取り組んだことを論証している。第二章では、いわゆる「漢詩文調」が宗因風の俳諧の閉塞状況を打ち破る一過性の奇趣追求であるとする従来の所説に、著者は蕉門ではむしろ肯定的に捉え、蕉風俳諧の定立に大きな示唆を与えたとする。その際に、芭蕉が「漢詩」にいかなる実態を感得したかが論じられ、『田舎の句合』（嵐雪序文）「東坡が風情、杜子が洒落、山谷が気色」、あるいは「詩は李白・杜甫が腸をさぐりて、東坡・山谷が風騷をまなび」（支考『続五論』新古論）などの言説から、杜甫・李白・蘇東坡・黄山谷などの唐宋詩人を規範とする考えが漢詩文調期に芭蕉によって作り上げられていた可能性を指摘する。芭蕉は詩を素材の一つとしてとらえ、俳諧に情趣が重なれば摂取し、俳諧に生かそうとしていたとまとめている。第三章では、『俳諧合』に見みられる芭蕉の判詞を視点に漢詩文に対する傾向を考察する。『田舎の句合』および『常盤屋の句合』の判詞中、五十番中二十三番が漢詩文を判詞に使用しており、しかも漢詩文を引用した方がおしなべて勝者になっている。これは平安期から広く接受された『和漢朗詠集』

『蒙求』、五山文学から受容されてきた『莊子』『古文真宝』『錦繡段』や杜詩などの漢文受容の影響下にあることを論証し、それが後の蕉風確立の先駆となっていると指摘する。

第二部「漢詩文調期の芭蕉俳諧と杜甫」第一章『田舎の句合』序考―「杜子が洒落」をめぐる―は、『田舎の句合』は其角の自作発句集に芭蕉が判詞を与えたものである。嵐雪の序文にある「東坡の風情、杜子が洒落、山谷が気色」の「洒落」につき、李白の詩風と対照的な沈鬱な傾向を挙げつつも、積極的な享楽主義があるとみとめている。第二章「芭蕉の初期の草庵を場とする」「わび―杜子とのかかわり」は、日本文学におけるそれまでの用例を挙げ、「初期の草庵を場とするもの」「後期の旅を場とするもの」と二分される前者に注目する。中国の隠逸、西行の清貧などを意識し、そこに喜びを感じる姿勢が「わび」という価値に結実してゆく過程に、杜詩が介在することを指摘している。第三章「深川移居前後の芭蕉俳文に現れた杜詩―その出典をめぐる―」は、従来における狭義の出典論に対し、当時の俳人らが享受しうる知識を提供した

ものという視点から改めて考察している。深川移居の俳文に見える杜詩の出典を挙げ、江戸時代の往時の版本の流通から十一種をつぶさに挙例している。第四章「芭蕉俳諧と『詩人玉屑』―杜甫の受容をめぐる―」は、従来の「詩話」との関連の指摘に加えて、芭蕉俳諧における『詩人玉屑』所収作品との関係を指摘し、とりわけ杜詩を「古今の詩歌を集大成した」「熟慮を重ねた作詩」「変化」などを評価した『詩人玉屑』を通して芭蕉は、杜甫を意識していったと考察する。

第三部「貞享期の芭蕉俳諧と漢詩文」第一章「蕉風樹立期の芭蕉俳諧と漢詩文」では、芭蕉の新風を確立した「虚栗」までの漢詩文の影響を平安時代以来の『白氏文集』『蒙求』等、五山文学以降の『古文真宝』等の二系統を指摘し、杜甫の沈鬱寂寥から「わび」を意識し、『野ざらし紀行』へと推移していく過程で、表面的な受容から漢詩文がすでに血肉化しており、蕉風定立に貢献していることを指摘している。第二章「四山の瓢―素翁李白にかはりて、我貧を清くせんとす―」では、芭蕉の俳文「四山の瓢」における山口素堂の句を媒介に、芭蕉における清貧を考察し、両者における脱俗高尚な生活感の共通性を指摘し

た。第三章『『蓑虫説跋』考―離騷のたくみ有にたり―』では、いわゆる「離騷」だけではなく、『離騷経』すなわち『楚辞』を意味すると認め、蕉風における隠者指向、『莊子』「無用の用」「自得」などに素堂の影響を認める。

第四部『『おくのほそ道』と漢詩文』第一章「田一枚植て立ち去る柳かな」の解釈をめぐって―陸機「猛虎行」とのかかわり―では、当該句の主語に注目し、「おくのほそ道鈔」に引く陸機「猛虎行」の冒頭二句が往時諺のごとく人口に膾炙し、風流の植物である柳すら悪木とし、そこを「立ち去る」ことに意味を認める。第二章「『国破れて山河あり、城春にして草青みたり』の解釈をめぐって」では、藤原三代の栄華が潰えた歴史を回顧し、荒廃した平泉を詠じたと断じている。第三章「山刀伐峠越え」「高山森々として一鳥声聞かず」の典拠をめぐって」では、従来王安石の絶句「鍾山」あるいは杜甫「蜀相」を出典とする説が有力であるが、著者は杜甫の李白詩引用の関係、芭蕉の断章取義的な傾向から李白の「荊州浮舟望蜀江」である可能性を指摘する。第四章「山中温泉 曾良との別れ―『隻鳧わかれて雲にまよふがごとし―』」では、曾良が病を得て離別に際

して詠んだ「隻鳧わかれて雲にまよふがごとし」は『蒙求』所収「李陵初詩」「雙鳧俱北飛、一鳧獨南翔」に依拠すると指摘されるが、芭蕉は敢えて「隻鳧」を俳諧味を増すために使用したと論じている。第五章『おくのほそ道鈔』と漢詩文―その引用と解釈をめぐる―は、現存最古の注釈書における漢詩文引用箇所七十八箇所全てを悉皆調査し、文脈上の最適解釈を探っている。その施注内容から（一）漢詩文と俳諧との影響関係の認めうるもの（二）字義の解釈（三）引用意図の不明確なもの　と大別が可能となり、後世の解釈に大きな影響を与えた点をつぶさに論じている。

第五部「芭蕉俳諧と漢詩文とその周辺」は、「付合語集」「俳諧類船集」に所収された漢詩文を通しての所謂二次受容を考察する。連句における『古文真宝』の影響、俳諧における楊貴妃像の諸相、釈奠を通して見た其角の句「聖堂にこまぬく蝶の袂哉」の新解釈の提出などである。

論文審査の結果の要旨

本論文における著者の意図は、従来の研究に少なからぬ指摘のある芭蕉俳諧に及ぼした漢詩文の影響にある。著者の言葉で言えば漢詩文を接受した「受容」とそこから種々の刺激を受けて漢詩文の影響ならではの窯変・昇華を「変容」として考察するというものである。したがって、従来の研究をいかに位置づけ、どのような新機軸を独自の視点をもって提供できるかが論文の意図を左右することになる。

まず本論文が独自性を持ち優れている点を指摘し、その後でさらなる課題を指摘することにする。

第一部から第三部にかけては、当時の俳諧における漢詩文調をつぶさに述べ、往時の漢詩文を取り上げることによって新味や和文調との緊張感を生み出したことを指摘している。また、判詞の漢詩文偏重、杜甫への私淑と「わび」に対する「杜詩が洒落」句の出典として、『詩人玉屑』からの受容を指摘したことは

成果と言って良い。漢詩文の重視が一過的なものであり、貞享期に漢詩文調は表面的には影を潜めたと考えられるとする所説に対して、著者は「四山の瓢」や「蓑虫跋」を通して、そうではなくその後も影響を持ち続けた点を述べ、反証している点は独自性がある。

第四部と第五部は、本論文の中心となる論考が占める。「高山森々として一鳥声を聞かず」の典拠としては従来杜甫の「蜀相」が考えられてきたが、李白「荊州浮舟蜀江」に見える「碧樹森森迎」が妥当であろうと述べ、「隻鳧のわかれて雲にまよふがごとし」では『蒙求』所引「李陵初詩」にある「雙鳧」をあえて「隻鳧」とすることで、曾良との惜別の情を深めたと論証したことなどにより、新たな出典を指摘し、さらに深い読みを可能にした。第四部の中心は、本論文の過半を占める芭蕉の『おくのほそ道』の最も古い注釈書である『おくのほそ道鈔』七十八箇所百十四例の悉皆調査である。注釈の一つ一つを詳細に分析することで、当該書の性質を明らかにし、内容を分類し、書物の執筆の傾向、後世への影響を指摘した。ここでは、芭蕉俳諧の漢詩文との関係を述べ、実態

を把握することで、当時の漢詩文の影響力や状況、また今後の研究史における方法論的な視座を提供したと言えよう。

第五部は、漢詩文の影響を直接的な関係性とは別に、いわゆる付合語集『俳諧類船集』に引かれる漢詩文の実態調査をし、芭蕉へ与えた状況的な影響を考察している。これにより、漢詩文の影響が直接的なものと間接的なものとに区分され、より広い意味での接受の実態を提供できていることは評価できよう。

本論文の優れた点は、芭蕉俳諧における漢詩文の受容と変容を芭蕉俳諧すべてに見ようとしたことにあり、同時にそれは芭蕉を取り巻く共時的かつ通時的漢詩文環境を視野に入れなければならないという発想に支えられている。また、反面で漢詩文を受け入れ、独自に受容し、時代ごとに異なった解釈を諸相としても見ていかなければならない必要性も物語っている。こうした試みは、ありそうである。そうした試みを評価したい。

一方で、課題もある。以下にその課題を挙げていくことにする。

従来の研究は、出典論に終始し、原典を挙げれば「こと足れり」とする傾向

にあった。それに対して「受容」と「変容」を見ることで芭蕉俳諧の表現がいかに変化したかという本論文の問いかけは貴重である。そうであるならば、そこに徹底的にこだわって見る必要がある。

第一部から第三部にかけて、芭蕉俳諧における重要語彙である「洒落」「わび」を考究するに際して、定義を辞書類に求めている。これにはむしろ新たに定義を与える、もしくは定義をし直すくらいの論証が欲しい。また、漢詩文調を述べるに際しては、江戸時代の全般的な漢詩文の受容を概説する必要がある。例えば、『古文真宝』や『杜律集解』の刊行や出版状況は、現在の出版状況についての研究から把握することができ、また何よりも室町期から江戸期への五山禅林の漢詩文興隆と後世への影響は、ぜひとも考慮すべきであろう。それにより、芭蕉を包む漢詩文の環境を描くことができ、論証を強化できる。その方面への視点が薄弱なために、一般的な庶民の流通した漢詩文への理解と、芭蕉が認めた理解とが同程度とみなす嫌いがある。漢詩文の受容によって、芭蕉の切り取り方や受け止め方が、芭蕉独自のものとなったことを論証すべきである。

著者は、芭蕉の漢詩文の理解や俳諧への応用を「断章取義」的であると言及しているが、この語の意味は原典や原義を踏まえながら、それと異なることを認識した上で自らの表現に生かすことである。芭蕉の漢詩文引用は断章ではあるが、「取義」についての解釈や説明が不足している。この点について、論述は概説的である必要はなく、本論文の主旨から言えば、そこにこそ丁寧な論証と解説が求められる。

言うまでもなく、文学作品は時代ごとの解釈があり、唐代の詩歌であれば、その後の宋代、元代、明代、清朝の解釈や注疏が存在し、重層的に蓄積され、多様な様相を呈している。芭蕉がどの時代の解釈を接受していたかは判断不可能な面があるにせよ、現代的な注釈に依拠することには慎重でなければならぬ。

本論文は、既発表論文の集成という性質もあるが、複数の章に重複する引用文、傍証、叙述が認められる。それを整理して一貫性を持たせ、簡潔にする必要がある。また、漢詩文の影響を考察する以上、引用する漢文文献は、訓点の扱いや表記には細心の注意が必要であろう。

以上の課題は、著者は十分認識しており、さらに研究の進化が期待できる。本論文は真摯な執筆態度で研究史を踏まえ、堅実な論証により芭蕉と漢詩文との関わりに新たな視点をもたらしたと言える。よって、本論文提出者塚越義幸氏は、博士（文学）の学位を授与される資格があるものと認められる。

平成二十九年十二月二日

主査	國學院大學教授	赤井益久	印
副査	國學院大學教授	石本道明	印
副査	和洋女子大学教授	佐藤勝明	印
副査	早稲田大学教授	堀誠	印

塚越 義幸 学力確認の結果の要旨

左記四名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試問を行った結果、博士（文学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十九年十二月二日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	赤井益久	印
副査	國學院大學教授	石本道明	印
副査	和洋女子大学教授	佐藤勝明	印
副査	早稲田大学教授	堀誠	印